

故ダイズイ・マックフィラミー師  
(英国、前禅仏教会会長) 著  
「カルマ (業) とは何か」

田 中 泰 賢 訳

訳者序

この論文はダイズイ・マックフィラミー (Daizui MacPhillamy) 氏が1995年に書き、2011年に出版されたものである。氏は1963年、アメリカのアマースト大学 (Amherst College) で心理学及び人間学の学士号を取得している。その後スタンフォード大学 (Stanford University) で教育学の修士号、更にオレゴン大学 (the University of Oregon) で臨床心理学の修士号と博士号を授与されている。1973年、ジュー・ケネット (Rev. Master Jiyu-Kennett, 1924-1996、女性) 師のもとでアメリカのシャスタ僧院 (Shasta Abbey) に於いて得度式を受けている。1978年、英国 (UK)、禅仏教会 (The Order of Buddhist Contemplatives) のマスター (Master) に選ばれている。ジュー・ケネット師の第一の補佐役として務めた。ジュー・ケネット師が1996年11月に亡くなるまで主要な介護人の一人として尽力した。ジュー・ケネット師の死後、禅仏教会の二番目の指導者に選ばれている。マックフィラミー氏は2003年4月、リンパ腺癌で亡くなるまで精いっぱい貢献した。享年57歳であった。

ジュー・ケネット師について少し述べてみたい。彼女は英国、サセックス (Sussex, England) で生まれている。洗礼名は Peggy Teresa Nancy であった。仏教との出会いは彼女の父親の書齋にあったエドウィン・アーノルドの詩作品『アジアの光』 (*The Light of Asia*) であった。その後上座部仏教を学んでいる。1954年、彼女はロンドン仏教協会 (the London Buddhist Society) の会員になった。1960年、曹洞宗大本山総持寺貫首であった孤峰智璨禅師 (1879-1967号は瑩堂(けいどう)) が欧米を巡錫中、ロンドンで彼女は孤峰禅師と巡り合った。1961年秋、彼女 (Peggy Kennett) は船でマレーシアに行きそこで仏教を学んだ後、日本に来ている。1962

年4月14日孤峰禅師の弟子になった。彼女は沢木興道老師の指導も受けている。彼女は Peggy Kennett から Jiyu-Kennett になった。1967年、孤峰禅師の遷化の後、彼女はアメリカにシャスタ仏教僧院 (Shasta Abbey)、英国にスロッセル・ホール・プライオリ (Throssel Hole Priory) そして禅仏教会 (the Order of Buddhist Contemplatives) を創設していき、今日ヨーロッパ、カナダへと広がりつつある。

マックフィラミー氏は曹洞禅の立場から書いている。氏はこの論文の中で『修証義』(しゅうしょうぎ)からも引用している。『修証義』は1890(明治23)年、道元禅師(1200-1253)の『正法眼蔵』(しょうぼうげんぞう)の中の語句をつづって編集された、曹洞宗の安心の標準と在家教化のための新纂聖典である。大内青巒氏が草案し、滝谷琢宗・畔上樸仙氏が編集したものである。その『修証義』から氏が引用している一節は次の通りである:「一日の生命は尊い命であり、大切な体である。このように修行ができる身心を自分自身でも大事にすべきであり、自分自身でも敬うべきである」(池田魯山訳)。ここの修行とは学生にとっては貴重な学生生活をさすことにもなるであろう。つまり今の学生生活を大切に過ごす事を意味する。『修証義』の元になっている『正法眼蔵』で道元禅師は「いま(今、而今)」という言葉を本当にたくさん使っている(加藤宗厚編『正法眼蔵要語索引』参照)。例えば「礼拝得髓」の巻で道元禅師は次のように述べておられる。

現今の極端な愚者たちの思っていることは「女性は貪欲と姪欲の対象物にすぎない」というような、歪曲された邪見による考え方を改めないで女性を見ている。かりそめにも仏弟子たる者は、このようであってはならない。女性を姪欲の対象物として嫌うならば、一切の男性についても同様である。相手の執愛の囚となって相手を汚すことでは男性も同様に執愛の対象となる。女性も対象となる。非男非女(ふたなり)も対象物となる。「夢幻空華」と観ずることも対象物となる。あるいは、水影が因縁となって汚れた性欲行為が行われることがある。或いは太陽が因縁となって、汚れた行為が行われることもあった。神も執愛の対象となる。鬼も執愛の対象物となる。その因縁は数え尽くすことができない程である八万四千の執愛があるといわれているが、これを、すべて捨てるべきであるのか、見てはならないのであるか。律(仏法の戒律)に言っている。男には二箇所、女には三箇所の性欲の対象物がある。この個所に於いて戒を犯すものは、不共住罪に問われて、僧団中に共住を許されないとする。このようであるから、人間男女が姪欲の対象物となるからと言って相嫌い対立するならば、一切の男性と、一切の女性と、互いに嫌い対立しあっておれば更に法の前で平等であるべき男女に、得度(出家して戒を受ける)の時期はない。この道理を詳しく究明すべきである。略。女性にどういう罪があるのか。男性にどういう徳

があるのか。悪人は、男性の中にもいる。善人は、女性の中にもいる。仏道の参学、出家を求めることは、必ず男性によるとか、女性はいけないということはない。もし迷いを断たないときには、男子も女子も共に同じく迷いを断つことができないのである。迷いを断ち切って、悟りを得るときには、男子・女子の区別などは更にあるわけではない。」（中村宗一他訳）。

### スロツセル・ホール仏教僧院、ヒュー・ゴウルド氏による序文

数ヶ月前1つの原稿が私の所に届いた。それは1995年にダイズイ氏を書いたものであった。当時彼は「HIV, AIDS 及び仏教徒の仕事」について書かれるべく一冊の書物における一章を担当するように依頼を受けていた。私には理由はわからないが、ダイズイ氏の本を書いたものがその書物には使用されなかった。その書物の題名やそれが出版されたかどうかさえわからない。2000年頃ダイズイ氏はオズウィン氏（ユージーン仏教僧院長）にその原稿を渡してから今日まで未出版のままであった。私はダイズイ氏の弟子としてこの原稿「カルマとは何か」を多くの読者に読んでもらえることを嬉しく思う。

この論文は彼が本領を発揮したものである。多くの見解や特質を例示している。このことから彼は私達僧院の本当に誇りとするメンバーであることがわかる。彼は注目に値する分析的な技能を使い、この論文「カルマとは何か」に於いてカルマと HIV, AIDS との関係を広く、詳しく論じている。

カルマの法則の働きはとても複雑であるが、ダイズイ氏は私たちが多くの重要な側面を考え、幾つかの誤解を明確にするのを助けてくれる。それによって私たちは幾つかの短絡的で誤った結論を避けることが出来る。

この論文はカルマへのさらなる明確な理解を打ちたて、HIV の予防、AIDS に耐えて生きること、死の可能性に直面すること、介護をすることに関することを考察している。この論文が書かれた時は HIV と AIDS の議論が時機を得ていた。今なおこのテーマは極めて重要であり、この論文の範囲はこれらの特定の問題を越えている。この論文で示されている結論と提案は私たち自身の中で見出すかもしれないどんな病気に対しても、どんな困難に対しても、どんな挑戦的な状況に対しても適用できる。

例えば「これは公平ではない」とか、または絶望的な驚きを伴った「何故わたしが」といった状況において適用が可能である。

カルマの法則の彼の慎重な分析に加えて、ダイズイ師は同様に重要である（と私は思う）二つの意見を与えている。この論文の最後の部分は介護をする人に多くの提言を与えている。結

局のところ私たちは皆介護人である。私たちが与えている介護は私たち自身の毎日の行動の瞬間、それは他者を伴うかもしれないことの中に生じることである。この介護をすること、それはまさにカルマの直接の探究である。それは私たちに生じてくるものに対する「愛と最高の敬意」を教えてくれる。

この論文の序文の終わりの所でダイズイ氏はカルマの問題の理解が十分ではないことを認めている。彼自身が彼自身の考えに十分に納得できないが、彼以上に仏教の教えをより多く体得する仏教徒が出ることを彼は期待している。この論文が書かれた時、ダイズイ氏は本当に最盛期であった。しかしこれは最終的な研究として書かれたものではなかった。これは異なる意見を十分に認識し、尊重する一つの提案である。これは「私たちのだれもが一人ぼっちになるよりもそれらの相互作用からより大きな真実の理解が生じる信頼」の中にあるのである。

## 本 文

HIV 及び AIDS に耐えて生きている人々、その人々を愛する人々、彼らを介護する人々、彼らから助言を求められるかもしれない僧侶、教師にとって、HIV 及び AIDS が提起する諸問題に仏教の方法を受け入れる時、遅かれ早かれカルマについての配慮が生じる。カルマと HIV と AIDS との関係について思いめぐらすのは当然である。本当に不快なことが起きた（或はいつか起きるかもしれない）時、仏教では私たちが行ったなにか悪い行為のカルマの結果によるものであるという、ある漠然とした観念を少なくとも持っている。HIV 感染及び AIDS につながる悪い行為とは何であるかについて問うことは筋が通ったことである。HIV 感染は普通はどのようなわけか性交あるいは麻薬を連想すると誰もが知っており、またこれら二つの行動の領域は多くの方面の人々から道徳的疑念を持ってみられているから、HIV と AIDS がひょっとすると「不道徳」のカルマの結果かもしれないと考えても咎められない。カルマに関する仏教の教えは私たちをどこに導くのか。幾つかの他の宗教が「AIDS は同性愛と麻薬常用者に対する神の刑罰である」というあからさまな表明をひそかに疑ったまま、哀れみと容認の語らいのもとで、終わってしまうのか。

私はそうは思わない。上記の考え方はもっともらしいが、思いつきの知識によるカルマの法則であって、正しいとは認められない。何故ならここで私が提案しようと願っている法則への一層詳細な探究に対して、それは耐えられないと思うからである。この探究は私自身の理解と経験のみならず仏教の思想及び教えに基づいている。仏教の思想及び教えに関しては、読者が自分でそれらを調べることができるよう巻末に参考文献を書きとめている。私自身の理解と経験に関しては、私が持っているかもしれない先入観によって捻じ曲げて伝えているかもしれ

ないことを読者に述べなければならない。倫理的規範的な行動は大切であると私は強い確信を持っている。路上で行われる麻薬の使用及び無責任で虐待的な性衝動に対して助言できるような指針を説明する [27: 129, 137 & 138] (27は巻末の文献一覧の番号を示している。：の後の129、137、138はその文献内の頁数を示している)。私は公式にはっきりと述べている [22] ように、同性の性行動はそれ自身、本来的に非倫理的ではない。全ての人々に開かれている仏教において、同性愛的志向の人々もあらゆる方法と形式で修行をすることが歓迎されているし、そのはずである。

AIDS との私の個人的な諸経験については、それらはさほど重大ではない。私にとって大切な何人かの人々は陽性の HIV で、AIDS に耐えて生きていたり、或いは AIDS で亡くなったりしているが、私自身は陽性の HIV ではない。重病の人に対して私は初期の介護者であり続けているが、その病気は AIDS ではない。農村の仏教僧院に住んでいるが、AIDS に耐えて生きている人々に助言をし、親密に一緒に仕事をする機会はほとんどない。私の仏教の思想及び教えについての研究は25年以上にわたってかなり広範囲にわたって続いている。このうち23年間は本格的な僧侶として過ごしてきた。すなわちジュー・ケネット師の弟子として修行をしている。私がここで述べることについては、ただ自ら進んで話をしており、私のカルマの諸問題についての理解が不十分であることはわかっている。正直なところ私が私自身と意見が一致しない。そんな私以上にダルマ（仏法）において多くの体験をする仏教徒達が現れるのを期待している。最終的には異なったいろいろな見解も尊重する。一人になるよりも異なった意見を持つ人々との言葉のやりとり、ふれあいから真理への一層大きな理解が生じてくると信じている。

第1節ではカルマの幾つかの重要な側面を考察しよう。もしそれが誤解されておれば HIV と AIDS について誤った結論をもたらしてしまうかもしれない。この主題について様々な仏教の教えに関しての幾つかの専門的な議論が求められるであろう。これらの議論はある読者にとっては少しばかり退屈で、学術的かもしれない。しかし次の節では否定的、独善的な判断の意見の不正確さを明示するだけでなく、幾つかの肯定的な提案への道を開きたいと望んでいる。

1. 全てがカルマの原因によるというわけではない [19: 9; 24: 84]。良いことであれ、悪いことであれ、良くも悪くもないことであれ、世界で起きるあらゆる事はカルマの原因によるという観念はおおよそ1800年間アンダカ (Andhaka) 派の時代 [25: xxviii & 314] から仏教を悩ませてきている。私達ときわめて関係があるものの中で病気と死はいつもカルマの原因によるとはかぎらない。全ての生き物の精神的な状態がどうであれ、病気と死は全ての生き物につきも

のである [13: 45-47; 25: 207]。病気と死が本当でなければ、世界はかつて生きた全ての阿羅漢と仏教聖者でいっぱいになるであろう。しかしそうではない。あなたも私もそうであるように、すべての人は死ぬのである。だから誰かが重病になったり、死にそうになったりという事実は必ずしも原因がカルマであるということの意味しない。つまり、そうかもしれないし、そうでないかもしれない。

それは何によって生じるのか。仏教ではカルマの法則は5種類の普遍的な自然法則 (*niyamas*) の一つであるとする [16: 24-27; 19: 9 & 10; 24: 84 & 85]。これらの一つ (*utu niyama*) はおよそ無機の自然の諸法則に相応する。それらは西洋では物理学、天文学、化学といったような分野に分類される。他方、もう一つ (*bija niyama*) は多かれ少なかれ私達が生物学的諸法則と呼んでいるもの、とりわけ遺伝学、進化論、ウイルスの疫学にあてはまる。これら他の普遍的な諸法則はカルマにかかわりなく機能している。そしてそれらは倫理、道徳、精神的価値、或いはいかなる人間の問題と関連しない。これらの機能は「公平」でもなく、「不公平」でもない。それらはただ存在する。つまり時たまの HIV は正確に言うとウイルスである。

2. 一つのタイプの行動と1つのカルマの結果の間には単一のつながり、一定不変のつながりはない [12: 227-230; 25: 356, 384-386]。他の普遍的諸法則から独自の機能を与えられて、一体カルマはウイルスの行動と関係があるだろうか。それはあるかもしれない。カルマ自身は物理的な対象物を生み出すことはできないし（また以前に何も存在しなかった所に魔法のようにウイルスを現すこともできない） [25: 309]。しかしそれは普遍的な他の法則の機能と互いに影響しあい、それらの法則を利用することが出来るし、その結果として起こる感情、知覚作用、欲望、思索、行動にも影響を与える。それは同様にウイルスの伝染のような他の結果につながっていくかもしれない。しかしながら他方においてたとえ HIV 或いは AIDS（或いは何か他のもの）が出現する時、それが時々カルマの要素を持っているとしても、それによって個々のカルマ的結果を持っている全ての人がある個別の行動をしたとは限らないし、また或る個別の行動をする全ての人がカルマ的結果を持っているとは限らない [21: 246 & 247; 25: 254-262]。私は仏教の「日曜学校」の子供向けの一冊の古い本を思い出す。そこにはカルマの結果がそれぞれのいたずらな行為に対して挙げられていた。「もしあなたが嘘をつけば、息が臭くなるでしょう」。私はそれを子供達への教訓として重んじなかった。大人の仏教徒にとっても普遍的な真理の表現として、それは全く間違っている。

その理由はカルマの法則の働きはとても複雑だからである。例えば一つの意志的な行為とその後に来るカルマの結果との相互作用（全てのカルマは意志的な行為によって動かされ始めている。ただし十分に悟りを開いた（啓発された）意志的な行為を除く全てはカルマを動かす始

めている）は行為の重大さの4つの側面のうちの一つの多変量の機能である（重大であろうと、習慣的であろうとなかろうと、それは死の境界点で生じ、そして頻繁に起きている）。カルマの機能に四つのタイプがある（カルマは直接に一つの結果をもたらすかもしれないし、他のカルマを増大させるかもしれないし、他のカルマを抑制するかもしれないし、或いは完全に他のカルマに取って代わるかもしれない）。結果について四つの時間の側面がある（この世に起きるかもしれないし、次の世に起きるかもしれないし、その次に起きるかもしれないし、或いはまったく起きないかもしれない）[6: 696-699; 16: 116; 24: 82 & 83]。ところでこれらの時間の側面は次のことを意味する。この世で起きる一つのカルマの結果はこの世でなされた行為と関係があると想定することはできない [9: 102]。その上カルマの行為の実際の仕組みといったような他の側面は諸仏以外の誰にも知られない [6: 699-701; 24: 81; 19: 9]。

さらにもう一つの複雑性を加えると、カルマはただ単一の基盤では作用しない。何人かの仏教徒は次のように信じている。集合的なカルマのような一つのものがあり、それを共有する人々だけでなく、彼らの環境にそれは影響するといわれている [30: 50-52]。この件についてはほとんど書かれていない。おそらくその理由はほとんど知られていないし、また集合的カルマの概念は人が望むどんな解釈をも生み出すことができるからでもある。例えば、HIVの場合、修道上保守的な人々はウイルスの発生と蔓延は現代人の「道徳に関する自由放任」という集合的カルマのためであると仮定している。それは修道上左派によって扇動されているというかもしれない。修道上の自由主義者はそれを私達の過剰人口や雨林環境の破壊の集合的なカルマの結果であると、あっさりと言うかもしれない。彼らは責任の一端を修道上右派に置くかもしれない。無機及び生物学上の諸法則のレベルで両者はそれぞれの側に基づく科学的証拠を持っているかもしれない。しかしこれが集合的カルマの作用に対して重要性を持つとしても誰も知らない。何故ならば集合的カルマの概念は社会問題についての意見のみならず、ほとんど或いは全く無い根拠に基づいて人々のグループについての偏見を正当化するために使われ得るから、それは確かに役に立たないことがわかる。ここではカルマの問題を理解する複雑さへの可能な貢献を認めることに触れる。しかしそれはかなり神学的な弊害の源になりうることに注意したい。

こういったことを考慮すると、カルマについて誰も普遍的な言明をすることが出来ないこと、その人自身及び十分に悟りを開いた仏陀以外は個々人のカルマを判断することはできないことを経典が保持しているのはほとんど驚くに当たらない。「そういうわけで、阿難陀よ、人の評価者になるな。人の評価をするな。阿難陀よ、まことに人の度合いを評価する人は自らを貶める。阿難陀よ、私だけが或いは私のような人が人の評価ができるのだ」[13: 248]。

3. AIDS は性の不品行或いは麻薬の乱用の一般的なカルマの諸結果のパターンには適合しない。カルマの結果について普遍的な或いは特定の個人の言説はなされないが、広く、全般的なパターンは述べられる。重い慢性病の発生或いは短い寿命を促すと伝承によって信じられている意志的な諸行為とは何か。それらは他者に対して故意の残虐な行為或いは命を奪うこと、重い病気の願望、そして誤った意見に執着することである [25: 249-250; 24: 78-80]。性の不品行或いは麻薬の乱用は特にこの文脈では強調されているようにみえない。

このことはそのような行為に対してカルマの結果はないと仏教が述べていることを意味しない。性的不品行への報いとしてそれらは一般に次のものを含むものとして述べられる。すなわち、多くの敵を持つ。いやな仲間を持つ。機能的な性器官をもたないで再生する。人が以前に虐待した性のメンバーとして再生する。ほこりまみれの場所に再生する。動物の習癖を持って再生する [7: 159; 24: 78-80; 25: 76; 30: 186-188]。慢性病は通例記載されないようにみえる。酩酊はたいいてい害のある行為につながるから、酔いをもたらす物質の使用はどんな結果にもつながると言っよい [7: 160]。

西洋の国々での HIV は一般の人々よりも同性愛の男性のほうがより高い頻度で生じている。だから同性どうしの性行為は基本的に本来「性の不品行」であるかどうかに関して、及びその特徴として否定的なカルマの結果の或るパターンを持つ傾向があるかどうかに関して或る人々から質問が起きるかもしれない。この章の最初のところで述べたように、私自身はそれがあるとは思わない。第一に性的志向はただ単に私が所属している団体によって分かち合っている一つの倫理的な問題、一つの見解ではない [18: 2]。従って、私達の団体の聖職叙任式において、また昇格において性的志向があるという理由で差別はしない。私達の聖職位に就いたメンバーは禁欲を守っているので、性の関心はさほど大きな影響は与えない。私達はまた平信徒の聖職者に関しても性の関心に基づいて差別はしない。そこでは結婚した異性のカップルに対し及び同等に結婚した同性のカップルに対しても同様の敬意を表す。性の行為に関して、私は以前、全ての意思に基づく行為はカルマの結果を持つと述べた。しかし志向が倫理的な問題でないとしても、全ての存在は平等であるから、ある与えられた意志的な行為、それが異性のパートナーの間に起きたことであれ、同性のパートナーの間に起きたことであれ、カルマの結果がかなり異なったレベルを持つということにならない。

この立場はしかしながら全ての仏教徒によって共有されてはいない。古代及び現代のかなり尊敬されている仏教の教師達の中には同性愛的傾向及び或いは同性の性行為を本来不品行であるとみなす人もいる [28: 76; 31: 25]。またパーリ語の律 (Pali Vinaya 古代インドの仏教徒の僧院の規則。多くの僧団によって様々な度合いによって用いられた。) は中性者 (pandakas) の聖職叙任式を禁じた。この言葉 (pandakas) は去勢された男子 (eunuchs)、両性具有者

(hermaphrodites)、性的不能な人 (impotent persons)、先天的な生殖器が欠けている人 (persons congenitally lacking sexual organs)、服装倒錯者 (transvestites)、性倒錯者 (transsexuals)、同性愛者 (homosexuals) 或いは既述の幾つか或いは全ての意味として様々に解釈されている [34: 204–209]。これらの規則の文脈と引用された実例から [4: 108 & 109; 5: 375]、真面目な仏教徒がたまたま同性愛者であり、両性愛の傾向を持っていた場合、その仏教徒の聖職授任式を否定したことが彼らの意図したものであったとは信じがたい。しかしそのような解釈は可能である [34: 207 & 208]。この問題の他の側面において同性の性行為を公然と支持し、及び或いは実行した仏教の伝統がわずかではあるが長い間あった [34: 210; 26]。

「反対」か「賛成」というはっきりした見解より、幾つかの意味で私にとって一層興味深いのはたいていの仏教の書物は（私が親しんでいる）この問題に関して中立であるか或いは単に沈黙しているという事実である。私が見出すことのできるこの問題への言及のほとんどは（特に宗教上の誓いによる）独身者の団体のための律の中にある。サンガの全ての三つの主なる派においてこれらは明白に或いは暗示的に同性の性行為を禁じている。しかし彼らはそれを特別なものとしてではなく、独身者に禁止しているが、多くの性的な可能性の一つとして取り組む [3: 48 & 49; 15: 13; 33: 17]。これ以上にほとんどの正統な書物はこのテーマを扱っていないように見える。例えば中性者 (*pandakas*) の聖職授任式の問題は大乗菩薩律 (Mahayana Bodhisattva Vinaya) には全然見いだされない。この律は聖職授任式に確実に障害となるものの中に性的志向、肉体的性的欠陥、或いは前の性的行動を列挙していない [27: 171–176]。仏教の書物の本質的な中立性の印象は私には珍しいことではない。少なくともこの領域を広範囲に調べた一人の学者は似たような結論に達している：即ち「同性愛的行動はインド仏教の書物には無視されていないけれど、それは異性愛的行動と同じ程度に無効にされている」 [34: 209]。同性愛の仏教徒の問題を扱っている或る仏教ジャーナルの最近の特集号において、全く聖典を根拠にした参考文献が引用されている論文がない [32] のは偶然ではないと思っている。もしかすると私の先入観が顔を出しているかもしれない。しかし性的志向は間違いなく倫理的な問題ではない。それゆえに同性の性的行為はおそらく異性愛の性的行為と等しくカルマの結果を生み出すであろう。

少なくともこのことは或る特定の人々の HIV 及び AIDS の原因において、その人の生涯から幾つかのカルマの構成要素はないかもしれないということの意味しない（後で調べよう）。しかし本当に有害な性の不品行及び麻薬の乱用がカルマ的結果を持つのだが、AIDS は「明らかに」不道德な生活様式のカルマ的結果であるという短絡的な意見は長い時代を通じてカルマの様式について認識されていることと適合しない。

4. たとえ AIDS が或る個人の人生において或る行為のカルマ的結果であるとしても、神の罰でもなく、神によるものでもない。少しの間でも仏教を学んでいる私達のほとんどはそれは創造主、神を前提としていないことを知っている。このことから論理上カルマは世界の他の四つの法則のように自然の法則であり、世界がどのように作用するかの記事であり、立法者によってなされる処罰の法ではないことになる [6: 701; 26: 24; 19: 9; 24: 76]。それでカルマの目的は何か。それは宇宙の創造主によって作られていないから、私達が通常思っている意味での「目的」ではなく、一つの結果であろう。即ちカルマは私達が仏教を学び、修行する動機となる。そのようにカルマは仏陀の慈悲の表れである。私達は他人や自分自身を傷つける行為をした結果として痛みを感じるから、そういったことをもう止めようと思う。しかしこのことを洞察しない人はただ痛みを受け、それを不思議に思うだけである。それに対して、カルマの慈悲の性質を理解する人は本当のよさ、本当の公平さ、本気になって悪事を差し控え、本物の坐禅に気付いていく [10: 172 & 173]。

結論として、カルマという観念で「AIDS は同性愛者及び薬物常用者への神の罰である」という考えが仏教にも相当すると誰かに思わせるならば、その考えが罪悪感で自身に向けられているように、非難を持って他人に向けられているように、それはおおかた間違っている。

カルマと HIV について伝えられ得る何か役に立つことはあるのだろうか。本当にあると思う。HIV 予防、AIDS に耐えていくこと、死の可能性に直面すること、及び介護することに関連するといわれることはあると思う。

1. 「良い人々」が HIV に罹ることがある。カルマの結果について人々にはかなり奇妙な思いがある。そのうちの一つは「悪い」人々だけが HIV 感染として知られている「カルマの結果」を受けるという思いであるが、上記の概念とは逆である。「良い」人々は HIV には罹らないということが正反対である。この思いは表面上馬鹿げているように見えないが、それは二つの仕方做起りうる。その二つはカルマが全ての、特に病気のような不快なことの原因であるという誤った潜在的な憶測を必要条件とする。第一に、良い (*kusala*) カルマは悪い (*akusala*) カルマを和らげ、阻止することを知っているならば、鍛練及び修行が熱心な人にとって、良いカルマの蓄積によって HIV に感染するという (或いは既に HIV 陽性であるならば、他人にウイルスをうつすという) 悪いカルマの結果を防ぐと考えるのは全面的に馬鹿げているわけではない。二番目に、悟った人々はカルマ (別の陳腐でずっと通俗的な妄想 [5]) の法則を受けにくいと考え、更に自身も悟っていると思うならば、どんな結果もない行為も可能であろう。どちらかの一連の推論から引き出す結論は性的関係を持つ時、介護者として HIV 陽性の体液を

扱う時、仏教の修行が熱心であれば、人は勧められる予防策をとる必要がないことになる。残念ながらこの考えは誤った憶測によって展開しており、普遍的諸法則の他の四つの独立した部類の存在を無視している。あなたが正しい条件を設定すれば、自分自身は悟っている、或いは良い人間であると考えようと、それに関係なく HIV の伝染は起こるだろうという風に生物学的諸法則は作用する。人は全世界の根本的な諸法則を修行による特別な「力」によって変えることが出来るという俗説は西暦200年頃のアンダカ派（私達と同じ古き友人達）にさかのぼる [25: 353 & 354]。HIV 予防の影響はあきらかである。即ち、ウイルスはえこひいきしない。

2. カルマを理解することによって AIDS に耐えている人がそれをうまく扱い、仏教をより効果的に修行することが可能となる。「それは公平ではない。何故私に」と尋ねるのはもっともな問いである。しかし明瞭に思考されなければ、かなり助けにならない心の状態に至るもの、即ち自信喪失及び非難の応酬といった絶え間ない繰り返しが生じてくる、それによって積極的な生き方や行いが蝕まれていく。だがカルマの理解によって、それを尋ねる必要性を感じている人々にとってその質問は役に立たないとはいえない。まず、無機及び生物学的諸法則のレベルでそれを見てみよう。ここで「何故」はまぎれもない答えを持っている。あなたが「w」の時、「z」という境遇で、「y」という原因から「x」というルートを経て HIV ウイルスがあなたの組織に入ったとしよう。そして実にそれは公平ではないし、不公平でもない。何故なら公平さ及び不公平さの概念は全世界のこれら諸法則と無関係であるから。それらは単に存在するだけである。それは誰かの「誤り」でもない。誰かが故意に HIV を伝染させようとし、或いは HIV に罹ろうとすることは非常にまれである。あなたが今知っていることをあなたは「z」という境遇で「w」の時に知っていたであろうか。恐らくそうではないであろう。あなたが今知っていることをその時は知らなかった。それはあなたが「w」の時、愚かであったことを意味するだろうか。いいえそうではありません。その時より今のほうがより賢くなっていることを意味する。その当時において私達はそれぞれ最も大切に思える事をするものである。別のことがもっとより良いことであることを後でわかるならば、それは私達に智慧がついてきており、言い換えれば私達自身或いは他の人が「愚か」でもなく、「知らず知らずに自滅的」でもなく、「悪い」ということではないことを意味する。一時的な後悔或いは怒りを感じる余地があるだろうか。つまり全世界の無機及び生物学的諸法則の観点から人は HIV 陽性にどういうわけであるのかについて明瞭に考えることは飾らずに存在するものを受け入れることを手助けしてくれる。師匠のジュー・ケネット師が以前述べたように「全て受け入れることは門の無い門への鍵となる」。全て受け入れることによって諸仏及び阿羅漢達が修行する病気及び死への取り組み方を人は取り入れることが出来る。

病気の兆候を示している有道の尊宿 (Ariyan) の弟子に病気がもたらされる。死にそうになっている有道の尊宿 (Ariyan) の弟子に死がもたらされる。衰弱している有道の尊宿 (Ariyan) の弟子に滅亡がもたらされる。終わりになりつつある有道の尊宿 (Ariyan) の弟子に最後がもたらされる。最後が近い時、その人は次のように反省する：「私にだけ終わりつつあることが終わりをもたらすのではない。生きとし生けるもの全ては去っていき、現れては死んでいく。終わりつつあることが終わりをもたらす」。病気になり、[或いは] 終わりが近づいている時、その人は悲しまないし、嘆かないし、泣かないし、泣き叫ばないし、胸をたたいて嘆き悲しまないし、取り乱すこともない。僧たちよ、この人は(仏教について) 学識のある有道の尊宿 (Ariyan) の弟子と呼ばれる。それに対して学識の無い人は悲しみの毒矢で長く苦しむ。悲しみもなく、毒矢から自由な人、有道の尊宿 (Ariyan) の弟子は自身を全く冷静に保っている [13: 46 & 47]。

人が HIV 陽性になるような一連の原因となる出来事の中にカルマ的構成要素が無い時、上記のことは「何故」という質問に対する十分な答えではないかと思う。実にこの点以外に質問を押し上げてしまうと無益で非建設的な堂々巡りの考えになりがちである。しかしあなたが次のように思っていると仮定しよう。それはあなたに関わっている或るカルマがあるかもしれない。一節で検討された誤解が避けられれば、それは又より深い仏教の修行を指し示す事が出来る。カルマのレベルで「何故」に対する答えを探す時、他の普遍的諸法則とは違って、カルマの法は公平である。即ち、全くそして完全にそうである [24: 76]。カルマがひょっとしたら或る人自身の立場に関係しているかもしれないことについて明確に考えようとするにそれは役立つ事が出来る。骨が折れるが、しかし、もしかすると有用な質問が明らかになる。「AIDS がもっともらしいカルマの結果であるほどに他の存在に大きな害を引き起こす何かを私はこの人生で行っただろうか。」この質問に答える過程において、普通見るのに最もありそうな範囲は意図的で、広範囲にわたり、おおいに破壊的な行い、即ち、他の存在に対する残酷な行為、或いは殺戮、憎しみ或いは恨み、或いはひどい妄想から来る行為を思い出してほしい。

あなたの人生で AIDS に相応する行いがカルマの結果であることを見出すことは全く考えられない。しかしそうだとしたらどうするか。仏教の別の派はカルマに異なった方法で対処する。即ち、あなたの指導者によって示されたやり方でその重要問題に取り組むことを勧める。あなたが特定のやり方を持たず、興味のある手がかりが無いならば、私の属している曹洞禅で行っていることを簡潔に述べたい。特にこのアプローチにおいて『修証義』(しゅしょうぎ) 及び道元禅師によって書かれた『正法眼蔵』の中の「生死」の巻を読むことを勧める。

私達が人生においてひどいことをしたことに気付く時、私達が行う最初の事はそれに真正面に向き合うことである。完全にそして注意深くその行為とその様々な影響を意識する。ところで正念と坐禅の修行をする事によってこのことがかなり安楽になる。この事が常に修行する理由の一つである。私達がしたことを完全にそして修正することなく自覚し、認めることによって、私達が危害を加えた生きとし生けるものへの共感が自然に湧き上がってくる。この事から深い懺悔（さんげ、懺はサンスクリット語 kṣama の音写で、許しを請うこと。悔はサンスクリット語 kṣama の意識で悔やむこと。人に罪の許しを請うこと）の念が生じる。「懺悔」は「やましい気持ち」ではなく、「羞恥心」でもない。これら二つ「やましい気持ち」と「羞恥心」は不完全な受け入れの状態に基づいており、全く助けにならない。懺悔によって人がした害悪を癒すのを助けるための、そして二度とそのような害悪をしないための修行をする決意が出てくる。この懺悔によって本気で修行に打ち込んでいき、決意が実を結んでいく（戒は仏教の重要な部分である。戒のサンスクリット語は śīla）。この決意と修行によって智慧の四つの基礎が自ずと出来あがってくる。即ち、一つは布施（むさばらないこと）、二つは愛語（愛情のこもった言葉を使うこと）、三つは利行（全ての存在に利益を与えること）、四つは同事（お互いに協力しながら事をなすこと）である。今度はこれらの四つの智慧が全ての存在に対して奉仕しようという気持ちを生み出していく。そこから菩薩の精神が現れてくる。そこから生涯を通して仏教の修行を続けていくようになる。

このプロセスは長い時間がかかるように見える。しかしそうではない。人がただ努力し、まっすぐに、ひるまず、正直にカルマに向き合うならば、それは今起きる。人が非常に体調が良くなく、恐らく残りの人生が短いとすればどうするか。それだけの価値があるだろうか。それは確かに価値がある。道元禅師はこのテーマについて『修証義』後半のところで次のように述べておられる。

いたずらに百歳いけらんはうらむべき日月なり、悲しむべき形骸なり。たとい百歳の日月は声色の奴婢と馳走すとも、そのなか一日の行持を行取せば、一生の百歳を行取するのみにあらず、百歳の侘生をも度取すべきなり。この一日の身命はとうとぶべき身命なり、とうとぶべき形骸なり。この行持あらん身心、みずからも愛すべし、みずからもうやもうべし。われらが行持によれて諸仏の行持見成し、諸仏の大道通達するなり。（仏道と関係なく無駄に百歳までも生きているのは実に残念な日月である。悲しむべき肉体である。たとえ百年の日月は、外界の刺激に引きずられて奴隷のように走りまわって過ごしたとしても、その中のたった一日でも、仏としての修行の生活を行ったならば、百歳の全生涯を修行によって取り返すばかりでなく、生まれ変わる次の生の百歳をも悟りの生涯とすること

ができるのである。たとえ百年の月日の中のたった一日でも、修行の生活を行ったならば、百歳の全生涯を修行によってわがもののできるばかりでなく、生まれ変わる次の生の百歳をも救いとることになるのである。このように一日の命は尊い命であり、大切な体である。このように修行の生活ができる身心を自分自身でも大事にすべきであり、自分自身でも敬うべきである。われわれの修行生活によって、諸仏の修行生活は現実のものとなり、諸仏の大道も現実のものとしてあらゆるところにゆきわたるのである。(池田魯山訳) [11: 163]

過去の行いとそのカルマに関連して、人の生涯が好評であるという結果においても多分懺悔すべき幾つかの行いを知るだろう。しかし AIDS のような激しいカルマの「目覚めコール」に帰するような重大生は無い。それでどうするか。より重要でない諸々のカルマに関して言えば(そのうちの幾つかはことによると影響を及ぼすかもしれない。しかし自身に原因はない)、あなた自身の仏教の伝統において上記のこと或いは相当することを簡潔に述べているやり方で、この生涯におけるそれらを一扫することは確かに建設的である。その人の生涯にどんな重大なカルマも認められない事実をどう解釈するか。二つの可能性が示唆される。即ち、一つは HIV 或いは AIDS に罹っているカルマの構成要素が存在しないほどに小さい(諸原因は主として全世界の無機及び生物学的諸法則の分野にある)。もう一つはこの生涯の前からのカルマが発展している。前者は前に論じられた。後者は明らかに少し超自然的である。

私はたまたま仏教の再生の教えを信じるようになった。それはカルマと同じ様に複雑であり、ただ不用意に学ぶなら、奇妙な見解を引き起こしやすいことを知るようになる。例えば、輪廻転生する魂は無い (*anatta*) [24: 95-97] という教えがどういう風にカルマの公正さの考え方と相互に作用するのかを考えてみてください。「私」が今収穫するものの種をまいたのは「私」であることを公正さは必要とするから、魂はあるに違いないように見える。或いは誰かが種をまいたものを「私」が収穫しているから、前の生からのカルマはひどく不公正に見える。実際、どちらも本当ではない。あなたとカルマを作った前の存在との間に関係はあるのだが、あなたは彼でもないし、彼女でもない [17: 17-21; 19: 8; 29: 47]。だからあなたが結果を刈り取る一人ではあるが、このカルマが生じることに對してあなたが原因ではない。或る程度あなたがこの重荷を受け入れるのを厭わなければ、それは公正であろう。それがまさしく私が起きると思っていることである。

ところでこの段落で扱っていることは主に私自身の経験と考え及び他の仏教徒達との議論に基づいていることを申し上げたい。だから經典の参照をしていない。(便宜上「あなた」と呼ぶ) 新しい精神的な存在を考えてみる。その新しい存在が本来の思いやりと一体化した場合、

それによって以前の存在では置き去りにしていた未解決のカルマの集まりを自然に「拾い上げ」、「引き受ける」ようになる。そうすることによってカルマが落ち着くようになる可能性が出てくるかもしれない。このカルマはひょっとしたら他の関係するカルマの集まり及び相殺する「良い」カルマの集まりに加えて、私達が「あなた」と呼ぶ新しい存在のカルマ的継承になると思う。しかしながら「あなた」は意識的には必ずしもこれに「同意」していない。「あなた」はそれにもかかわらずこの重荷を担いだのである。何故なら「あなた」には、本来の思いやりという本性があるから。「あなた」が担いでいるカルマ的継承はあなたの誕生、あなたの基本的な人格及び気質、そしてこの人生であなたが扱う精神的諸問題の状況と一致するものだろう。これらと協調し、修行していけば、あなたの人生を充実したものにするだけでなく、過去からの一つ或いはそれ以上のカルマを落ち着かせるようになる。この時、本当の意味で私達は皆菩薩になる。

それは興味を引く神学[教義]かもしれない。それは一体どんな役に立つだろうか。第一に、それによって過去の人生のカルマが耐えやすくなる。即ち「あなた」がしなかったという過去の不快な何かについて苦しみ、困惑するような罪悪感と不面目の気持ちから開放されるであろう。第二に、それについて何かをする為にああなたの過去のカルマについて全ての事を探り出す必要性がないことが明らかになる。つまりこの人生に於いてあなたの気質と諸問題を扱うことによって、過去のカルマを落ち着かせるために必要なあらゆる事をあなたはしているから。或る人達は過去のカルマに任意の識見を持っている。それは有用でありうるが、そのような洞察を不自然に誘発する必要はない（それによって誤った洞察とあらゆる種類の外的危険に曝してしまう）。第三に、カルマの重荷をこの人生で背負う自己自身及び他に対して最も深い敬意の念が生じる。即ち、彼らは他の存在より「より悪い」ということはない。彼らは全世界に平和を齎そうと一生懸命に努める人達である。彼らの AIDS が遠い過去からの或る重いカルマによって幾分左右されていると誰かが感じる場合（いいですか、その人自身のみがそのような結論になる）、その人は私達の感謝を受けるに値する。またその人は AIDS に耐え、AIDS を克服しようとすることによって、全ての調和に貢献する素晴らしい機会を有している。

どのように AIDS に耐え、AIDS を克服しようとするかは、この書物の幾つかの他の章に於いてこの分野では私より遥かに精通している方々によって書かれている。この章に於いて私はカルマを扱っている幾つかの側面のみにもふれる。遠い過去の事物のカルマについて考えることは二つ以上の側面を示唆する。人が過去のカルマが何であるかということに任意の識見を持っているというやや稀な状況に於いて、人がこの世のカルマを扱うのと同じ方法でそれらに接近するかもしれない。一つの例外を除いて。人がこの世で行っている事に対して深い後悔の念を感じる代わりに、或る他の存在が過去にした事（人はその存在とのつながりを感じている）を

人が充分自覚した時、深い悲しみが自然に起こってくるでしょう。この悲しみから人は自身の人生に於いての全ての性癖を見て、そして対処する決意が生じてくるだろう。その人生がずっと以前の過ちと同じ方向に進むのか、或いは過去の中道を逆の間違い（よく起こる出来事）に変えるのか。ところで、これは過去の人生のデータの任意の識見が正確である可能性があるかどうかを知るための方法の一つである。それはこの世におけるあなた自身について役に立つ何か或るものを教えてくれるだろう。経験にしがみついた執念もなく、過去の出来事を繰り返す執念もないことを。鍛え、修行する決意によって、上で述べたのと同じ仕方により深く理解できるようになるであろう。

あなたがそのような洞察力を持っていないという場合には、一つの勘というものがある。それによって、遠い過去に対処しなければならない、カルマ的何かが生じている事を知る。そうすることによって、人はこの人生に於いて自由を見出すだけでなく、引きずっているかもしれないカルマ的継承を落ち着かせるという確信を持って修行を推し進めるのに充分である。この事に関して私の言葉だけを受け取る必要はない。中国の禅僧、菩提達磨は次のように語っている。

次の事がお分かりになろう。つまり、全てのカルマの苦しみはそれ自身の心から生じる。しかしその人自身の考えが支離滅裂にならないように心を保ち、その上誤った事や不正な事から身を引くならば、三界六道をぐるぐるとその人を回転させているカルマが自ずと消散するであろう。人の苦しみを取り除くこの力は開放と呼ばれるものである。[2: 361]

菩提達磨はここで魔法のような解決策を述べているのではない事を強調したい。カルマが落ち着き始め、執着によって齎される苦しみ（カルマと戦っていることを含む）が止むのだが、私達全てが免れることの出来ない病気と終局の死の過程、それに伴う肉体の苦痛は魔法のように取り除くことはできない。全世界の他の四つの法則の結果の様に、カルマの結果は悟った人達も避けられない [8: 96-101; 14: 189, 192-195]。必然でないものはそのカルマの継続と執着から生まれた苦しみの継続である。カルマを落ち着かせることによって、人は病気の痛みや不快感に平静さと元気を入りこませることがより一層可能となる。17世紀の盤珪禅師（師の生涯は痛みを伴う重い病があった）は病と痛みと直面した時、それらに関わりあいにならず、振り回されなかった。不生禅で自意識を保った。痛みがあるなら、痛いままにうめくのだ。このようにして耐え忍ぶことのできないものは無い [1: 62 & 63]。

この節での全ての資料は「何故私に」という質問をする必要性を感じている人々のために用意されている。この質問が有意義で、実際的な方法で取り組まれる事を期待する。そのように

取り組まれる時、一層深く受容され、理解されていくように願う。第一に質問される必要はあるのか。私達がそれを問う度ごとに達する所：即ち、存在する物の受容、無執着、或る形の瞑想、倫理的な生活、全ての生きているものに役立つように尽力することを調べることによって、それに対する答えは明白である。もし人が直接にこれらの事に進むならば、この人生の諸問題を解決するために「何故」という質問を持ちかける必要性は無い。私達はこの人生に於いて精いっぱい生き、修行するために必要な事をすることによってそれを飾り気なく見るから、私達のどんな過去のカルマも自然に一掃される。「何故」という質問もどんな過去の人生の問題を解決するためには必要が無い。以上の事から次のような結論になる。もしあなたが「何故」という問いをしないで、ビジネス生活と仏教の修行を行っておれば、是非それを行いなさい。他方、「何故」が重要な質問に思えるのであれば、カルマの知識はそれが実りある質問になるように役立つであろう。

### 3. カルマを扱うことは安らかな死に役立つ。

カルマは解決されなければ、死後残っていくものであるから、死ぬ前にそれに注意を払う気持ちを持つことは死の時に心の大きな圧迫を取り除くことになる。弊師、ジュー・ケネットは生命を脅かす病気になった時、上で述べた種々のことをすることによりかなりの努力をした [20]。似たような状況の人々に次のような助言を呈している。

勇気を出して鍛えなさい。あなたの人生をみがきなさい。生じてくるあらゆる事に目を向ける事を恐れてはいけない。格別の事を期待してはいけない。心を鎮めなさい。心を平静に、油断なく、師の教える事は何でも受け入れなさい。それがあなたにとって好ましい。あなたは一人では無い事を知りなさい。師はあなたを拒絶しない事を知りなさい。師、機会、教えを拒絶してはならない。あなたの心にある事を知るように努めなさい。たとえ話す人がいなくても、あなたと師は申し分なく修行を行っていくであろう。[17: 14 & 15]。

4. カルマの正しい理解は世話をするにあたっての幾つかの障害を取り除くのに役立つ。 第一に、明らかになるように、判断の姿勢が適切であるようなカルマの状況は無い。たとえそれが微かであろうとも。愛と最高の敬意こそカルマの一つの探究が教えることである。第二に、或る人のカルマは非常に個人的なことであり、彼ら及び仏陀のみがそれについて確実に知りうるものである。世話をする人にとって善以上に害を及ぼすといけないから、このことは私達が別のカルマは何であり、それに取り組む仕方を知ること想定することに慎重である事を示唆する。それは又或る人が自身のカルマを調べる時期が熟した時、自身で見分ける事が最もよく出

来る事も示唆する。即ち、世話をする人はそれをする様々な方法に関する情報を提供し、照会し、読むべき資料を与えることができる。しかしこの試みを推し進める気持ちには細心の注意が必要である。第三に、或る人自身がその人（彼或は彼女）自身のカルマを扱う事が出来るのは明らかである。他の人はどんなに興味があっても、又理解力があっても、自分以外の彼或は彼女のためにそれをする事は出来ない。どうぞ、あなたの友人が望んでいることは何でも話し合い、注意深く耳を傾け、力説し、理解し、共有し、求められる実行可能な事は何でもしよう。しかし干渉してはいけない。友人に干渉しない。カルマについて疑い、恐怖、絶望につながるような流布している非常に安易で、ぼやけた意見から友人を守り、助ける事が出来る。多分ここで書かれている事はこの点であなたとあなたの友人の助けになるかもしれない。第四にこの章は人のカルマの探究がより深い修行への、及び生死の最も根本的な諸問題への入り口であることを示唆していることを願う。それなりに少なくとも私にとって、それは敬意を払って取り組むべきテーマである。

最後に、過去及び現代の仏教指導者達によって与えられるアドバイスを介護者が正しく理解する一つの背景としてカルマの理解が役に立つことを願う。例えば、釈迦牟尼仏自身を取り上げてみる。仏陀は病人の世話をする人々に次のようにすることを勧めた。即ち、助けになる事と助けにならない事の見分け方を知る事。助けになる事と助けにならない事を提供する事。善意で病人の世話をし、私的な利益を図って行ってはならない事。身体的機能を嫌ってはいけない事。ダルマ（仏法）の話しをして病人を奮起させ、喜ばせ、満足させる事。[13: 110 & 111]。カルマについてははっきりした思考はこういった提案から意図される事を理解するのに役立つ。疑いなく命絶えんとしている人々を助けている方々に私の師の言葉を紹介する。

何よりもまず、人々を敬愛しなさい。どんな環境にあっても人々及びその人達の病気を排斥してはいけない。彼らと共にいて、彼らを敬愛しなさい。彼らが納得するようにさせなさい。しかし拒絶があってはいけない。彼らにあなたの意見を押しつけてはいけない。彼らを改宗させようとしてはいけない。言い換えれば、彼らと師の間にあなた自身が割り込んではいけません。命絶えんとしている人は人間と廣大無辺な仏陀によって抱かれている事を知る必要がある。あなたは自分の本分を果たしなさい。廣大無辺の仏陀（お釈迦さま）は私達全ての存在を温かく見守って下さるのである。[17: 22]

## 著者文献 (References)

1. *Bankei Zen*. P. Haskel, trans, New York: Grove Press, 1984.
2. "Bodhidharma's Discourse on Pure Meditation," in *Buddhist Writings on Meditation and Daily Practice*. H.

- Nearman, trans. Mt. Shasta, CA: Shasta Abbey Press, 1994, pp.351–382.
3. *The Book of the Discipline (Vinaya-Pitaka) Vol. I*. I. Horner, trans. London: Pali Text Society, 1982.
  4. *Ibid.*, Vol. IV, 1982.
  5. *Ibid.*, Vol. V, 1982.
  6. Buddhaghosa, B., *The Path of Purification (Visuddhimagga)*. Bhikkhu Nanamoli, trans. Kandy, Sri Lanka: Buddhist Publication Society, 1979.
  7. Dhammananda, K. *What Buddhists Believe*. Kuala Lumpur, Malaysia: Buddhist Missionary Society, 1987.
  8. Dōgen, Eihei, “Jinshin Inga (Deep believe in causality)”, in *Shōbōgenzō*, Vol. III. K. Nishiyama, trans. Tokyo: Nakayama Sobo, 1983, pp. 96–101.
  9. \_\_\_\_\_, “Sanjigo (Karmic retribution in the three periods of time)”, in *Ibid.*, pp. 102–111.
  10. \_\_\_\_\_, “Shoakumakusa (Refrain from all evil)”, in *Shōbōgenzō*, Vol. II. K. Nishiyama, trans. Tokyo: Nakayama Shobo, 1977, pp. 171–177.
  11. \_\_\_\_\_, “Shushogi (What is truly meant by training and enlightenment?)” and “Shoji (Life and Death)” in *Zen is Eternal Life*. P. Jiyu-Kennett, trans. Mt. Shasta, CA: Shasta Abbey Press, 1987, pp. 155–165.
  12. *Gradual Sayings (Anguttara-Nikaya)*, Vol. 1. F. Woodward, trans. London: Pali Text Society, 1979.
  13. *Gradual Sayings (Anguttara-Nikaya)*, Vol. 3. E. Hare, trans. London: Pali Text Society, 1979.
  14. *Gradual Sayings (Anguttara-Nikaya)*, Vol. 5. F. Woodward, trans. London: Pali Text Society, 1986.
  15. Gyatso, Tenzin (XIV Dalai Lama), *Advice from Buddha Shakyamuni*. Dharamsala, India: Library of Tibetan Works and Archives, 1982.
  16. Jayasuriya, W., *The Psychology and Philosophy of Buddhism*. Colombo, Sri Lanka: Young Men’s Buddhist Association Press, 1963.
  17. Jiyu-Kennett, P., “How to grow a lotus blossom or how a Zen Buddhist prepares for death: some questions and answers.” *Journal of Shasta Abbey*, VIII, n. 2 & 3, 1977, pp. 14–22.
  18. \_\_\_\_\_, “Foreword to this special issue.” *Journal of Shasta Abbey*, IX, n. 3 & 4, 1978, pp. 2–4. Reiterated in personal communication 3/14/96.
  19. \_\_\_\_\_. *Zen is Eternal Life*. Mt. Shasta, CA: Shasta Abbey Press, 1987.
  20. \_\_\_\_\_. *How to Grow a Lotus Blossom*. Mt. Shasta, CA: Shasta Abbey Press, 1993.
  21. *Kindred Sayings (Sanyutta-Nikaya) Vol. IV*. F. Woodward, trans. London: Pali Text Society, 1980.
  22. Mac Phillamy, D., “Can gay people train in Buddhism?” *Journal of Shasta Abbey*, IX, n. 3 & 4, 1978, pp. 39–44.
  23. *Middle Length Sayings (Majjhima-Nikaya) Vol. III*. I. Horner, trans. Oxford: Pali Text Society, 1990.
  24. Narada Thera, *A Manual of Buddhism*. Kuala Lumpur, Malaysia: The Buddhist Missionary Society, 1971.
  25. *Points of Controversy (Katha-Vatthu)*. S. Aung & C Rhys-Davids, trans. London: Pali Text Society, 1969.
  26. Shalow, P., “Kukai and the Tradition of Male Love in Japanese Buddhism,” in *Buddhism, Sexuality, and Gender*, J. Cabezon, ed. Albany, NY: State University of New York Press, 1992, pp. 215–230.
  27. “The Scripture of Brahma’s Net,” in *Buddhist Writings on Meditation and Daily Practice*. H. Nearman, trans. Mt. Shasta, CA: Shasta Abbey Press, 1994, pp. 49–188.
  28. sGampopa, *The Jewel Ornament of Liberation*. H. Guenther, trans. Boulder, Colorado: Prajna Press, 1981.
  29. Shantideva Acharya, *A Guide to the Bodhisattva’s Way of Life*. S. Batchelor, trans. Dharamsala, India: Library of Tibetan Works and Archives, 1979.

30. *The Surangama Sutra (Leng Yen Ching)*. L. Yu (C. Luk), trans. Bombay: B. I. Publications, 1966.
31. Tin, U Chit, *The Coming Buddha Ariya Metteyya*. Kandy, Sri Lanka: Buddhist Publications Society, 1992.
32. *Turning Wheel*, Fall, 1992. Berkeley, CA: Buddhist Peace Fellowship.
33. Yen-Kaat, *Makayana Vinaya*. Bangkok: Wat Bhoman Khunnarama, 1960.
34. Zwilling, L., “Homosexuality as Seen in Indian Buddhist Texts,” in *Buddhism, Sexuality, and Gender*, J. Cabezon, ed. Albany, N Y: State University of New York Press, pp. 203–214.

### 訳者が翻訳に使用したテキスト

Rev. Master Daizui MacPhillamy, “What About Karma?” *The Journal of the Order of Buddhist Contemplatives*. Vol. 26, Nos. 2 & 3. Summer/Autumn 2011, pp. 1–28.

### 訳者による引用及び参考文献

池田魯山『対照修証義』四季社、2009（平成21）。

石川力山『禪宗小事典』法蔵館、1999（平成11）。

小倉玄照『修証義の言葉』誠信書房、2003（平成15）。

加藤宗厚編『修訂正法眼蔵要語索引』（全2巻）名著普及会、1987（昭和62）。

中村元『仏教語大辞典』（全3巻）東京書籍、1975（昭和50）。

中村宗一他訳『全訳正法眼蔵』（全4巻）誠信書房、1978（昭和53）。

“The Memoriam Rev. Master Jiyu-Kennett 1924–1996” Special Memorial Issue, *The Journal of the Order of Buddhist Contemplatives*. Vol. 11, No. 4 & Vol. 12, No. 1. Winter 1996/Spring 1997, pp. 6–13.